劇団はぐるま座公演

映像と音楽と朗読による構成

峠三吉と子どもの詩

『序』

峠 三吉

ちちをかえせ
ははをかえせ
としよりをかえせ
こどもをかえせ

わたしをかえせ
わたしにつながる
にんげんをかえせ

にんげんの
にんげんのよのあるかぎり
くずれぬへいわを
へいわをかえせ

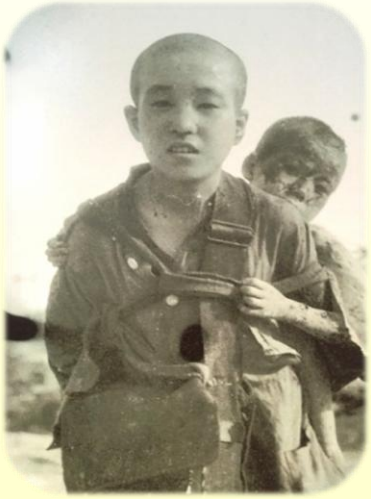
峠三吉（一九一七～一九五三）

広島を代表する原爆詩人。二八歳の時、爆心地から二kmの自宅で被爆しました。

一九五〇年――敗戦から五年目の占領下。原爆について一言も語ることができなかった広島で、峠三吉は実名で原爆の惨状を訴える数々の詩を発表。翌年には「原爆詩集」を刊行しました。

以来、三六歳で亡くなるまで、市民の中を歩き回って丹念に話を聞き、被爆市民の思いを代弁する原爆詩を書き続け、多くの人々を励ましました。

一九五二年には、生き残った当時の子どもたちが記した詩集「原子雲の下より」の編纂を手掛けた。



多くの青少年に届けたい

海原　三勇

『峠三吉と子どもの詩』の公開稽古に、劇団近隣の方々とともに参加することができた。地域の自治会長をはじめ多くの人たちが忙しいなか、時間を割いて感想や意見を積極的に出しておられ、地域に開かれた人民劇団のあり方として感銘を受けた。

今、戦争体験者、被爆者が子どもたちや若い世代に体験を語りつぐ活動が活発になっているが、その反響は大きい。峠三吉は原爆の悲惨さ、投下した者への怒りを詩で書いている。『峠三吉と子どもの詩』は、それを映像と音楽を組み合わせて朗読するものだ。向洋中学校での『礒永秀雄の詩と童話』公演でも痛感したが、小中学生に朗読を聞かせることの教育的効果は非常に大きなものがある。

今回、初めて峠三吉を知り、朗読を聞いて涙を流す人もいた。下関で稽古をやってこられたが、良い作品と言ってもまず地元の方たちに見てもらわないと始まらない。

下関を拠点に、市民のさまざまな要望に応じて紙芝居や読み聞かせを含む大小さまざまな公演や取り組みを広げ、全国に広げて行って欲しい。

ミニ公演を学校やまちづくり協議会などでおこなっていくことを期待する。

（向洋中学校学校運営協議会会長）

㊤小学校ＰＴＡの行事で
㊧舞台を鑑賞する中学生

感想より

▼「序」という詩には、何度も「かえせ」という語句が使われています。それほど、原爆で戻ってこなかったものは大きい、と感じました。絶対に忘れないこと、二度と同じことを起こさないこと。小さな子供でも知るために周りが教えていくこと。

（沖縄県、中学生男子）

▼子どもたちは戦争が遠い昔のことだと思っている。学校でも学ぶ機会は少ない。教育の一環として教育現場を回って公演して欲しい。（下関市、自治会役員）

▼峠三吉さんの事を初めて知り、詩を通じて当時の人たちの気持ちを学べた。当時の小中学生の詩は子どもたちにとってメッセージ性が強いと思う。

（下関市、三〇代男性）

無題

広島市南観音小学校五年
佐藤智子

よしこちゃんが
やけどで　ねていて
とまとがたべたいというので
おかあちゃんが
かいだしにいっている
あいだに
よしこちゃんは
しんでいた
いもばっかしたべさせて
ころしちゃったねと
おかあちゃんは　ないた
わたしも　ないた
みんなも　ないた

（舞台で朗読される原爆詩から）

劇団はぐるま座
下関市武久町２丁目６１-１０
TEL　０８３-２５４-０５１６
FAX　０８３-２５２-５９６４